

No.63 • 2006/1/1

ジバレター

PEOPLE 北島和成さん	1
特集 ■力を合わせる 社会が変わる〜異世代協働による子どもの社会的自立促進フォーラム報告〜	2
青年のボランティア活動を支える■ 明日飛子ども自立の里/調布学園	4
ボランティア365 OBはいま ■河島京美	5
私流・若者への関わり方 ■足立圭子	5
JYVA REPORT ■青少年ボランティア活動推進者セミナー報告/「ライブJ」がスタート	6
体験報告会を開催しました	7
時代=次代への提言■ 太田昌也	7
JYVA INFORMATION ■ご挨拶/ACTION/THANKS	8

注目を集める郵政民営化法案の影で、 連日、国会周辺や委員会の傍聴席 で「障害者自立支援法案反対」を訴える 障害者や支援者の輪があったが、障害者 施策を抜本的に見直す法案は可決された。 「食べる、飲む、着替えることにまで一 割負担|利用者への影響を自分のことの ように心配する。「一般の人は働きにい くのに職場で利用料を払いますか? そ んなことないでしょ。併せて生活するの に最低限のことにまで負担が…」情りを 感じながらも、穏やかな口調で語りかけ る北島さん。やさしい物腰、対照的な鋭 い眼孔、大きな体と若白髪が際立つ。熊 本県にある知的障害者通所授産施設に勤 務し、自らの夢である「作業所」をひと りで立ち上げたつれあいと暮らす。北島 さんの日常は障害者とともにある。

「目が悪いなら、眼鏡が必要でしょ。障害をもった人たちに手を貸すのは、必要としているから。ふつうの人たちですよ」。何も変わらないことなのだ。

高校卒業後、地元企業に就職した。設計屋だった。偶然見つけた新聞記事「九州青年の船」。上司に掛け合い有給と特別休暇を1週間ずつ得て、中国を訪れた。

船に乗り合わせた青年団をはじめ、地域で活動を行っている人たちとの出会いが転機となった。帰国後、アフター5や休日を利用して社会教育にのめり込んだ。仕事と活動を両立する日々。県費で参加した研修でボランティア365を知った。勤めて10年の実績を楯に会社との新たな休暇交渉を行うが、壁は厚かった。「ボランティア元年」といわれた年、企業

では「ボランティア休暇・休職制度」の 環境整備が進んだ。時期が遅ければ、休 職できて今も会社にいたかもしれない。 人生の岐路になった。

福祉施設に行ったこともなかった北島 さんが派遣されたのは北海道の剣淵町に ある障害者施設。国内初の完全個室の入 所施設であった。福祉について白紙の北 島さんにとって、福祉の基準は剣淵での 体験だ。1年が経つころ、おぼろげなが ら福祉の道を選択していた。地元の施設 を廻ると、自分の基準が他では理想であ ることに驚いた。たまたま遊びに訪れた 同期のボランティアが活動した団体で、 「10年、15年先のことを見据えて、今を語 る」代表の魅力と、任意団体から社会福 祉法人認可申請をする話に惹れた。北島 さんのチャレンジ精神に火がついた。対 象が必要としているから動く。無から有 をつくり出す。北島さんの心意気である。

福祉の仕事について10年。施設とともに歩んできた。県の委託事業を行っていた無認可施設の法人化に始まり、デイサービス、ホームヘルプ、グループホームなど利用者のさまざまなニーズにあわせ、多機能なサービスを展開してきた。

障害者自立支援法でどんな変化が起こるのか、不安はある。しかし利用者と歩んできた経験は、「時代の流れにそったサービスを、適切にやっていくことが大切」という教訓を刻んできた。今後生じる難題にも、「利用者のために、関係機関を説得できればいい」。大きな体は障害者の守護神に見えた。

(取材/石川)

常 PEOPLI

社会福祉法人青いりんごの会 銀河ステーション

きたじまかずなり

特定非営利活動法人なずな工房

「利用者あってのサービス、 施設に利用者を あわせるのではない」 社会情勢の変化に 憂慮しつつ、信念を貫く ボランティア365 OB。





http://www.ginga-station.com/ http://www.nazuna.or.jp/